

東京女高師の地理巡検：1939年の満州旅行（1）

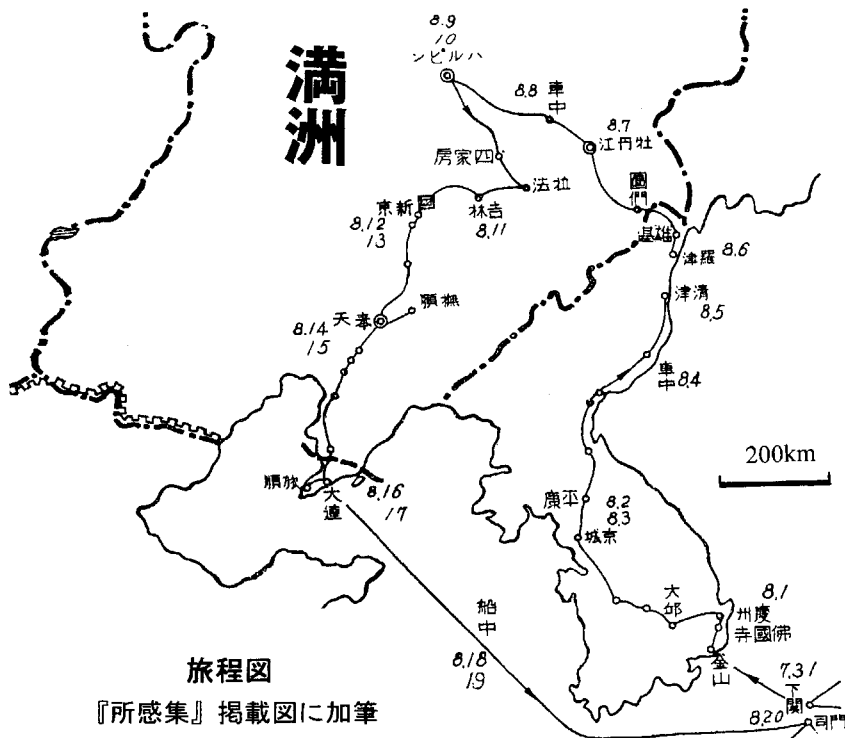
内田 忠 賢

1. はじめに

1939（昭和14）年7月31日午後8時、東京女子高等師範学校（現・お茶の水女子大学、以下、女高師）3、4年生の一行43名は、下関駅に集合した。皆、大きなリュックサックを背負っていた。一行を乗せた関釜連絡船の金剛丸は、午後10時30分、下関港の岸壁を離れた。彼女たちは、船中で宿泊した後、翌日の午前6時に釜山港に着く。当時、日本領だった朝鮮半島各地を見学の後、8月7日、雄基から列車にて出国し、満州国の閩門に入った。そして、ハルピンや新京、奉天など満州国主要部を移動、見学する。8月18日午前11時30分、彼女たちを乗せた客船は門司港を目指し、大連港を離れ、帰途に着いた。

本報告では、この女高師の大陸旅行および参加した女子学生たちの感想文を紹介する。特に、満州国での、女高師生の見聞と感想を検討してみたい。その目的は、第一に、五族共和を唱え、日本による傀儡政権が樹立されたものの、政治的に不安定な地域を学生たちがどのように実感し、理解していたかを知ること、第二に、戦中に、地理的な海外巡検（見学旅行）がどのように実施されていたかを知ること、である。

本報告を書くきっかけは、お茶の水女子大学地理学教室書庫の奥に無造作に積み上げられていた古い資料群の中から、『大陸視察旅行所感集 昭和十四年』¹⁾（以下、『所感集』）という報告書を見つけたことにある。管見の限り、戦中の高等教育機関が実施した海外巡検についての報告は少なく、この資料を紹介することは貴重であると判断



した。また、当時の地理学担当教官が企画・実施したという点で、地理教育史の問題とも関わる。そして、戦中の教育内容を知る上でも、貴重な資料である。本報告は予察・覚書の段階に過ぎないが、以上の理由により公にする次第である。

2. 学校行事としての大陸旅行²⁾

女高師の大陸巡検を紹介するに先立ち、学校行事としての長期旅行の歴史について触れておきたい。学校行事のうち比較的長期の旅行と言えば、修学旅行を想定するのに異論はなからう。現在の修学旅行の嚆矢は、1886(明治19)年2月に東京師範学校(後の東京高等師範学校、筑波大学の前身)の「長途遠足」である。そして、この学校が実施した同年12月の長途遠足が、初めて修学旅行と名付けられた。翌年以降、修学旅行と呼ばれる学校行事が、各地で盛んとなる。教育面での目的だけでなく、国内の鉄道幹線、各地の短距離の鉄道線の敷設も、修学旅行が促進された要因だと言われる。たとえば、鳥取師範学校(現・鳥取大学教育学部)が、1890(明治23)年に、19日間をかけて長期の修学旅行を行っている。往路では、3日間にわたる長距離の徒歩の後、汽車で有年(うね)、姫路を経て、神戸港から汽船に乗る。その2日後に東京に到着した。東京に滞在した8日間は、女高師、東京帝大、国会など近代を代表する施設を見学する。この東京見物の後、鳥取師範一行は往路とは異なる交通手段を取り、6日間の復路をたどった。いずれにせよ、明治20年代以降、師範学校を中心に、国内の長期修学旅行が実施されたという。

海外への学校行事としての旅行としては、1906(明治39)年に東京高等師範学校が実施した、中国への修学旅行が最初である。30日間、総勢192名の大旅行である。文部省と陸軍のバックアップを受け、旅順、奉天、遼陽、大連を歴訪し、戦跡視察をただけでなく、植物や昆虫採集、史跡見学などを行ったとされる。これ以後、師範学校や高等学校(旧制)による戦跡見学を中心とする大陸への修学旅行はしばしば実施されたい。しかし、1940(昭和15)年6月の文部省通達により修学旅行が制限されるようになる。この通達により、学校行事としての旅行は、短期の、しかも軍事教練的なものに限られた。したがって、1939

(昭和14)年に実施された女高師の大陸巡検は、戦前・戦中における高等教育機関による最後の海外旅行に分類されるのである。

3. 当時の女高師と引率者、飯本信之³⁾

巡検の前(1938)年に、国家総動員法が成立した。女高師も、それを受け、同年7月の5日間および9月10日、集団勤労作業として、学生たちは軍用品の裁縫や隣接する豊島岡墓所の清掃を行った。翌年には、学期中にも集団勤労作業が実施されることになる。その後、工場での勤労奉仕も大幅に加わった。また、女高師でも報国会や防護団が組織され、本格的な総動員体制に入っていった。

当時の女高師には、文科、理科、家事科の他、研究科、選科、保育実習科があった。文科、理科、家事科は、それぞれ毎年、30~40名前後の卒業生を出していた。1937(昭和12)年に新設された体育科が卒業生を出すのは、1941年の37名が最初である。地理学の専門科目は、文科第二部に属し、「地理学通論(経済地理学、人種民族地理学、地貌学など)」「本邦地誌」「外国地誌」「実習(教育実習)」が開講されていた。なお、地歴関連の「教授法」は当時も、附属高等女学校教諭が担当していたようである。週当たりの授業時間数は、1~3年次までが4時間、4年次の1・2学期が3時間、その他、2~4年次(4年次は1学期)に教育実習がそれぞれ1回あった。

さて、巡検の企画、引率をした当時の地理学教授は、1923(大正11)年に女高師に赴任した飯本信之(1895~1989)である。東京帝大出身の飯本は、赴任当初、地質鉱物担当であったが、地理学教授だった西村万寿の急逝(1926年)を受け、地理学担当に配置換えとなった。彼は、自然地理学が専門であったが、同時代のドイツ地理学の影響を受け、政治地理学を研究するようになった。昭和の初めには『政治地理学』(1929年、改造社)、大陸巡検の数年前には『政治地理学研究』(上巻1935年、下巻1936年、中興館)を出版している。飯本の回想によれば、政治地理学を専攻するきっかけは、関東大震災で焼け残ったドイツの地理学専門誌 *Petermanns Mitteilungen* に、地政学の専門誌 *Zeitschrift für Geopolitik* の広告があり、それを買って求めて興味を持ったからだという。飯本は自ら、自分の専門は地政学ではなく政治地理

学であると述べるように、日本の帝国主義を正当化するアジテーションを積極的にはしていないようである。日本地政学を提唱し、軍部に利用された当時の京都帝大教授、小牧実繁の場合とは異なり、ドイツ地政学の紹介者に徹していた。そのため、彼は戦中、地政学協会の常務理事を務めたにもかかわらず、戦後の公職追放の対象とはなっていない⁴⁾。実際、彼の著作『政治地理学』の中でも、地政学は国家の政治的活動に関わるのに対し、政治地理学は「国家の地理的実態および形態」を客観的に認識する分野であると明記している⁵⁾。飯本は『所感集』でも、本音はともかく、「日鮮満三種族のある程度の融合雑婚を提唱」(7頁)し、植民地において日本人とその他の民族を対等に扱うほうが良いという旨の発言をしている。しかし、昭和初期の日本の地理学は、地政学的色彩が強く、飯本も良くも悪くも、国家主義的な流れの中で外部からは評価されていた可能性は否定はできない。

4. 満州国⁶⁾

女高師の学生達が訪ねた満州国については、数多くの研究書や紹介書があり、周知のことも多いので、概略のみ記しておきたい。

1931(昭和6)年に満州事変が勃発し、翌年3月1日、大日本帝国政府および関東軍の画策により、清朝最後の第12代皇帝(宣統帝)だった溥儀が執政(元首)となり、満州国が建国された。同時に、満州国では大同元年という年号となる。当初、共和制を敷いていたが、1934(昭和9)年、満州国は、溥儀を皇帝とする帝政に移行し、満州帝国が出来上がる。溥儀は復辟したのである。満州国では「王道楽土」「五族協和」をスローガンとしていた。五族とは、満州(女真)族、漢族、朝鮮族、蒙古族、日本人である。実際は、日本が支配権の中樞を担う傀儡国家であった。もう少し正確に言えば、満州国は国家ではない。満州には、領土はあるが、国民と主権がないからである。国民と主権がないと言うのは、次の理由による。現地での支配民族だった日本人は満州国に国籍を移すことを嫌ったため、国民と主権を設定したならば、満州族ほか四つの民族が国民と認定されることになる。その場合、日本人ではなく、彼らに主権が与えられるからである。実質的には日本の植

民地だったため、多くの国々は満州国を認めず、リットン調査団の視察結果を受けて、日本が国際連盟を脱退したのは周知のとおりである。これ以後、終戦直後の満州国滅亡まで、日本の影響下、実質的な支配下で、この地域は推移するのである。そのため、満州国内では日本人とその他の民族が常に緊張関係にあり、その一方、隣接するソ連、モンゴル、中国とは国境付近で軍による衝突を繰り返した。女高師生が満州国を訪ねた1939年には、ノモンハンで満州・日本(関東軍)軍とモンゴル・ソ連軍が衝突し(1, 5月)、8月には本格的な戦闘になった⁷⁾。『所感集』では緊張の中にも安定した政情が描かれるが、実際は相当に危険な状態だったのである。

5. 大陸旅行の背景

この巡検は、当時の文部省、陸軍省の指導の下で実施された。満州移住協会、満州開拓公社から旅費が提供され、時局に応じた巡検先が選ばれている。当局としては、できるだけ多くの日本人、とりわけ女子エリートの予備軍であった女高師の学生に、日本の影響下で、日本人が活躍する満州国の一面を見せたかったことは明らかだろう。

さて、巡検の企画立案者、引率者は、前述のように地理学者、飯本信之である。飯本の著書や講義の内容と女高師の巡検内容との関連は不明である。当時の飯本の主な担当科目のひとつは「外国地誌」であるが、この講義内容が分からないため、現時点では何とも言えない。今後の課題としておきたい。

もう一人の引率者、津田芳雄は専門が英文学であり、本人が言うように「如蘭会の理事」として同行したにすぎない⁸⁾。『所感集』にも記されるように、この巡検は飯本の企画であり、専門分野から考えて、津田が巡検内容に関わったとは思えない。『所感集』に記された、学生たちの調査報告は明らかに地理学的な色彩が強く、津田の意向は反映していないと考えるのが妥当だろう。

ところで、如蘭会とは、1993(明治26)年に創設された、女高師の教職員と生徒との懇親会の名称である。1939(昭和14)年に発行された雑誌『如蘭』第10号によれば、この「満鮮旅行」は、如蘭会の行事の中でも、旅行部というサークルの旅行と記録されている⁹⁾。しかし、参加人数

が40人と多数に上っているため、旅行部所属の学生だけが参加したとは思えず、飯本および旅行部の呼びかけで、全校から参加希望者を募ったものと推測される。

6. 『所感集』の内容

274頁に及ぶB5判の『所感集』の構成は、以下のとおりである（：の後は執筆者）。

満鮮視察旅行所感：飯本信之 教授	pp. 1-7
満鮮旅行に参加して：津田芳雄 教授	8-10
満鮮に旅して：木村都 囑託	11-20
紀行（記録）：文科の計6人	21-60
報告集：文科，理科，体育科，家事科の計18人	63-184
感想集：文科，理科の15人	187-274

まず、目次と旅行日程、旅程図（地図）および写真8頁がある（なお、本文中にも写真が3頁分、挿入されている）。次に、引率教官だった飯本、津田、木村の文章が続く。

飯本は自然地理学者らしく、まず自然環境と生活様式を説明し、次に政治地理学者らしく、大陸移民の現状と課題に言及している。飯本は特に「民族の協和問題」について触れ、「我々は大アジア主義の目的のためには結局凡ゆる民族を同化しなければならぬと思います」（6頁）と述べている。前述のように、彼の主張は、日本人優先や民族差別では必ずしもないのだが、「民族的に一国家的民族が出現しました時こそ、日本人の満州であり、日本化した新満州人の満州であり、東洋人の東洋であるとの深い信念が自ら現出し、東洋の平和は期せずして得られるのではないかと思います」（7頁）と、当時の日本の立場を代弁する発言もしている。実は、この飯本の文章には、「満鮮視察旅行報告会に於いて口述せしもの」、「速記」と注記されており、関係当局者が列席した会場での講演記録と推測される。と言うのも、飯本は講演の最初に「各当局に対する感謝」を事細かに述べているからである。感謝の対象は、女高師や現地の人々よりも、文部省や陸軍省、満州開拓公社や満州移住協会、協和会（満州帝国協和会）や満鉄（南満州鉄道）、ジャパン・ツーリスト・ビューロー（日本国際観光局、日本交通公社

の前身）であった。なお、この中で、巡検の3か月前に女高師で満蒙開拓青年義勇軍について講演した¹⁰⁾加藤完治だけは個人名を挙げ、彼にお礼を述べている。

また、木村は大陸旅行での個々の地域の見聞を述べ、最後に、女高師の目的である教育者養成にからめて「環境も異ふ。誰が子供を立派な日本人に育て上げるのであろうか。それこそ家庭教育が総べてとなる。そして教育者は母である。そう云ふ環境や状態に於ても、誤りなく子供を育てる母を作る事。こうした意図の下に教育される少女達がやがて母になる」（19頁）と付け加えている。

次に、学生たちの「紀行（記録）」、「報告集」が続く。「紀行」では、日記形式で3週間の行動が感想を交えながら記される。「報告集」では、旅行中のグループ学習の成果が述べられている。前半で、地理学的な視点からのデータの紹介や考察として、「寒暖計行」（各地の気温の記録）、「満州交通」、「満鮮の都市」というレポートが記される。「報告集」の後半では、現地の生活と教育の実態が報告される。タイトルだけ挙げれば、「都市及開拓地における衛生と体育」、「満鮮人の生活」、「満鮮に於ける衣食住」、「朝鮮の教育」、「満州に於ける教育雑感」というレポートが書かれている。以上の「紀行（記録）」、「報告集」には興味深い記述が散見されるが、本報告では、これらに続く「感想集」の部分を中心に紹介したいので、紙幅の関係もあり省略する。

7. 学生たちの感想文

そこで、満州国での彼女たちの見聞と感想を一部、紹介する。この「感想集」には、合計88頁分が割かれている。まず、タイトルを挙げると、「満鮮風物ところどころ」、「自然・人・思ひ」、「街頭所見」、「新京城内を見学して」、「満鮮旅行の思ひ出」、「感想」、「大陸を歩んで」、「朝鮮及在満鮮人」、「青年訓練所を訪ねて」、「四家房開拓団を訪れて」、「一つの感想」、「満州国と東亜協同体」、「理想をめざして」の13本である。個々の感想文には、彼女達なりに見聞した現実や現地に住む日本人および他の民族への印象が述べられている。全体的に、日本および日本人の満州進出（侵略）を肯定し、他民族を教化すべきという、当時の論調に従った記述が多い。

「満州国が吾が生命線であると言ふ事は今まで何処となく聞かされた事である。然しこの旅行によってはじめてその真意義に触れる事が出来たやうに思う。…結局満州は之等の多くの血と肉の犠牲によつて建設されたのである。私は軍隊の有難さを大陸に来て痛感したのであるがその軍隊の力によつてとにかく満州国は誕生した。今までの立役者は軍人であった。然し今や満州は第二の段階に入ったのである。此の期における真の立役者は鋤と鋤を持つた農業移民でなければならぬと思う。土地に根を下しその上に強い愛着を持つた農民こそ自然に平和に満州国を融合同化して行くものだと思ふ。(中略)外形の城壁と共にこの精神的なる障壁が取り去られた時に真に日満両国民の融和提携の花が実を結ぶのだと思ふ。…其所には大きな犠牲敬愛と強い実行力時に細心の注意をもつた人、広い意味での母心が必要である。この自然土に対して母心をもつ者は農民を外にして誰があらう。農業移民こそ日満提携の花を咲かせる母である」(「大陸を歩んで」大坪節子 [文科3年], 232～233頁)

ところが、詳しく読んでみると、当時の論調に異を唱える箇所も、多くはないが散見する。女高師の学生たちは、社会情勢の雰囲気流されず、それなりに現状を直視したのではないだろうか。大陸旅行は軍関係者ほか当局の後援を受けているため、当然、『所感集』は彼らの目に触れる。したがって、満州国での日本や日本人の行動や態度を非難する記述は、問題視されるはずである。学生たちも、そのことを十分承知した上で、あえてレポートしたと思われる。

「私は、どこに行つてもよく満州街に遊びに行つた。そして一つの満州に居る我々同胞に対して、遺憾を感じるのだ。満州在住の日本人はマーチョに乗つてゐても道を歩いてゐても、実に意気揚々としてゐて眼付、態度などもきびきびと、見るからに聡明さうでさすがは東亜の盟主である。しかし私は彼等にある冷たさを感じた。彼等は知らず知らずに傲慢に陥つてゐるのではなからうか。勿論全部がとは言はない。むしろハルピンのホテルに居た女中さんの、徹底した親切さには、感謝せざるを得なかつた。実に、やさしくて、気がきいてゐて、私は心から感心した。しかし、一般として日本人の店、デパートでも、小売店でも、彼らは、いささかのお世辞愛嬌も言わない。女店員で

さえ、品物を唯並べて、聞けば値段をポツリと言ふ。愛嬌などは内地に置き忘れて来たといふ形。これは非常に悲しむべき態度ではなからうか。東亜の輝く盟主として、満州国、中華民国と、手を取り合つて行かねばならぬ大任ある日本人が此の様子態度で果たして、この目的が達せられるであらうか。我々同胞に対してさへ、こんな冷淡な態度なのだもの。まして…と思つた時、自らひやりとしたものを感じた。これに対し度々、遊びに行つた満人街の商人は本当に親切であつた。言葉こそ通じないが、いかにも好意ある物腰であつた。ロシア人も一層感じが良かつた。(中略)又満人の体格の良さにも一驚を喫した。殊に胸廓の広く、体全体の骨格のたくましさは、内地人、殊にいはゆる文化人とは比べものにならない。顔付きもしつかりしてゐて頼もしさを感じさせる。『将来性のある面魂だ』私はさう思つた。彼等がもつと文化に目覚め、衛生思想も発達し、組織的に社会を建設する様になつたら実に立派になるだらう。我々は、誤つた優越感に自己陶醉してゐたらどんなことになるか分からない。私は友邦の頼もしさを喜び且、日本人の自己認識を再び促す必要を感じた」(「満鮮旅行の思ひで」須田善子 [理科4年], 221～222頁)

また、満州国の前提である「五族協和」や、日本や関東軍が主張する「民族協和」「民族同化」も、女高師の学生の目から見て、現実と掛け離れていたようである。現地の多くの日本人が支配者然として行動していたからである。

「端的に言えば、現実と理想の間にはまだまだ距離がある様に思はれたのである。(中略)全く異なつた風土と歴史の下で育つた民族の差異といふものは、結局ぬきがたい力を持つのではないだろうか。之らの異民族同志(ママ)が、民族の区別など全く忘れて一つにとけ合ひ、協和する、理想の時は、果たして何時の日に来るのであらうか。次に、之らの異民族の中に於ける日本人自身の生活態度にも随分考へさせられるものがあつた。民族協和の満州国の真義を忘れ、先達民族としての自らの使命を自覚せず、日本人の為のみの満州国であるかの如く生活してゐる日本人がかなり多い様に思つた。どこの町でも日本人は日本人町に集まり、大人も子供も男も女も、満人等に対しては一段優越せる者として威張つた態度を以て接してゐるのであつた。牡丹江の邦人小学校の先生は、

児童の気風が内地に比し非常に横柄で贅沢で、所謂植民地的気風である事を嘆じて居られた。又、何処へ行つても日本語が大手を振って通用するので、随分長く満州にゐる人々でも、満語を覚えようと努力する人は殆どないと話も聞いた。言葉が判らないから、意思の疎通なども一向行はれないわけであつた。だが之でいいのだらうか。この現状のままでは、日満不可分、一徳一心の道義的理想とは余りにもかけ離れてはゐるのではないだらうか。結局道義国家の建設などは実現し得ぬ美しい夢なのではないだらうか。」(「理想を目ざして」乙骨菊江 [文科4年], 269～271頁)

むろん、須田は、上記の抜粋箇所だけでも、日本のことを「東亜の盟主」と2度も呼んでいる。乙骨も、感想文を「日本人は、優越者として政治的・経済的・軍事的・文化的に満州を支配するのではなくして、先達者としての自覚を以て、他の民族を理想の国へと、あたたかく導いて行かねばならない」(272頁)と締めくくっている。彼女たちは軍国主義的、帝国主義的な雰囲気の中で育ってきたので、アジアの中での日本の立場については刷り込まれていたであろう。今回の巡検でも、関東軍の息が掛かったすべての訪問先で、満州国の理想や日本の建前を何度も聞かされた。しかし、須田も乙骨も現実を前にして、上のような感想を率直に持ったのである。

8. おわりに

本報告では、地理学教授が企画・引率した、1939年の女高師の大陸旅行について、その背景も含め、若干の紹介をした。『所感集』の内容についても、表面的になぞったにすぎない。まさに予察、覚書の段階である。ご存命の参加者、関係者へのインタビューさえ、まだ行なっていない。非常に不備な報告だと自覚しつつも、資料の重要性や速報性を考え、まずは公にしてみた。ただ、お茶大生の先輩たちが、何を見て、何を考えたかを知ることができ、有意義な作業であった。より詳細な検討は、他日を期したい。

注

- 1) 大陸視察旅行団(編)『大陸視察旅行所感集』同旅行団、1940年。なお、この旅行団の所在地は当然な

がら女高師内、代表者は女高師地理学教授、飯本信之である。

- 2) 主として、白幡洋三郎『旅行ノススメ：昭和が生んだ庶民の“新文化”』中央公論社(中公新書)、1996年、85～149頁；久保尚之『満州の誕生：日米摩擦のはじまり』丸善(丸善ライブラリー)、1996年、2～50頁；荒山正彦『戦前期における朝鮮・満州へのツーリズム：植民地視察の記録『鮮満の旅』から』『関西学院史学』第26号、1999年、1～22頁、による。
- 3) 主として、お茶の水女子大学百年史刊行委員会(編)『お茶の水女子大学百年史』、同委員会、1984年、195～205頁、526～529頁、854～855頁、による。
- 4) 竹内啓一・正井泰夫(編)『地理学を学ぶ』古今書院、1986年、128～140頁(「戦前の思い出：飯本信之先生に聞く」)。なお、飯本は、昭和11年から13年に欧米を回り、ドイツでは地政学の大物でミュンヘン大学教授だったハウスフォーファーに出会い、少なからず影響を受けたようである。
- 5) 飯本信之『政治地理学』改造社、1929年、31～38頁。引用は31頁。
- 6) 主として、山本有造(編)『“満州国”の研究』京都大学人文科学研究所、1993年；山室信一『キメラ：満州国の肖像』中央公論社(中公新書)、1993年、1996年；川村湊『満州鉄道まぼろし旅行』ネスコ、1998年、による。
- 7) 中山隆志『関東軍』講談社(講談社選書メチエ)、2000年、192～209頁
- 8) 前掲注1)、8頁。
- 9) 「旅行部報告」『如蘭』第10号、1939年、49頁。この雑誌によれば、学術部小報告(講演会記録)として、加藤完治「満蒙開拓青年義勇軍に就いて」という講演(1939年4月26日)が、女高師で開催された(39頁)。同記事では「出席者の大部分は、この夏に行われた(ママ)如蘭会満鮮旅行参加希望者でした」とある。また、『如蘭』第7号(1936年)には、夏目アキエが「ハルビン小感(ロシア人と支那人と)」という少々、過激な随想文を寄稿している(54～61頁)。また、日本人の当時の満州経験については、坂部晶子「植民地の記憶の社会学：日本人にとっての“満州”経験」『ソシオロジ』第44巻3号、2000年、109～125頁、が参考となる。
- 10) 前掲注9)。

うちだ・ただよし

お茶の水女子大学 助教授